若き姫の荊棘（けいきょく）

紀藤雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
若き姫の荊棘（けいきょく）

【Ｎコード】
Ｎ４８０５Ｚ

【作者名】
紀藤雅

【あらすじ】
病気で若くして命を落とした少年が、何者かの導きにより、ある国の王女として再誕する。
そんな彼女（彼）の成長物語。

文章に対する誤字脱字の指摘や、批評などございましたらぜひお願いします　m（＿＿）m

前章（前）～病気の少年～（前書き）

始めまして！　紀藤です！

初投稿で色々至らぬとこがあると思いますがよろしくお願いします！

前章（前）～病気の少年～

様々な生物が活動を始めているだろう、そんな朝、カーテンを突き刺すような太陽光が僕の体をまぶしく照らしていた。

「んっーー」

最近色々あって寝たっきりだった僕は、久しぶりに目を覚まし背伸びをした。

（今日はなんか調子がいいなぁ）

ここは、某都内の病院。僕は生まれつき心臓に病気を抱えていて、幼少期から何度も入退院を繰り返していたのだけれど、ここ最近は特に症状がひどく長期入院を余儀なくされている状態だった。

「香君。おはようございます。今日の調子はどう？」

そんな時、専任の看護士さんが朝の検診にやってきた。

「はいっ。今日はひさしぶりに調子がいいみたいで、なんかすがすがしい気持ちですよ。」

（本当におかしいぐらい・・・・）

「そうっ！！きっと、香君ががんばってきたからねっ。このまま行けば、きっとよくなるわよ！」

「ありがとうございます。」

看護士さんの大げさな励ましに、軽く礼を言っておいた。

しばらくして看護師さんが去った後、僕はおもむろに読みかけの本をかばんから取り出した。

（こんな調子のいい日はめったにないんだから）

そう思いながら、取り出した本は大好きなファンタジー小説だった。

（うん！やっぱりファンタジーはいいな！一時的でも現実を忘れて、没頭できるし！）

僕はその後もずっと本を読み続けた。まるで貪(むさぼ)るように・・・

少年の家では、つやのある髪を後ろで括った女性と髪をツインテールにした小学生くらいの少女が何やら話し込んでいた。

二人は、少年の母であり、妹であった。

「私も、お兄ちゃんのお見舞いに行きたい！！」

「お見舞いって・・。由愛～、あなた今日学校でしょう？」

母である明美は、ほとほと困っていた。先から、娘の由愛が兄の所に行くと言って聞かないのだ。

「学校なんていいの！！　今日はお兄ちゃんの所に行くの！！」

と一点張り。

（もう～。仕方のない子。）

と思いつつも、明美は、そんな娘のわがままに対して強く反発することはできなかった。

ずっと病気がちで、同年代の友達も少ない息子。そんな息子に対して好意（と言っていいかはわからないが）を寄せる娘を、ほほえましく思っていたのもあったのかもしれない。

「ふぅ～。　わかったわ、ママと一緒に行きましょう。その代わり、ちゃんと大人しくしてるのよ？」

「うん！！」

結局、明美は娘を連れて行くことに決めた。

前章（前）~病気の少年~（後書き）

これからよろしくお願いします　m（_　_）m

前章（中）~少年と家族~（前書き）

こんばんわ。
拙い文章だと思いますが、どうかご愛嬌ください　m（＿＿）m
また、文章に対する誤字脱字の指摘や、批評などございましたらぜひお願いします　m（＿＿）m

前章（中）～少年と家族～

同日昼

娘を待合室においた明美は、
病院の診察室で、医師と話し込んでいた。

「かねてから申し上げたとおり、香君はもう長くはないでしょう。ですから、今日のような日はもう訪れないかもしれません・・。」

「はい・・。」

「どうか、ご家族の時間を大切になさってください。」

「はい・・。ありがとうございます。」

なだめる医師と沈む母親、部屋には二人の重い雰囲気が漂っていた。

僕が読んでいる本は、ファンタジーの中でもいわゆる王道といわれている部類のもので、王国の辺境に住む主人公の少年が、自身の持つ力によって様々な人と出会い、戦い、そして時勢の流れに巻き込まれていく話。

自身が歩んできた人生に比べて、猛々しく、輝いている。そんな魅力が僕を惹きつけてやまなかった。あるいは自身の抱く諦観にも似た感情が、そうさせたのかもしれない。

『コンコン』
その時、病室のドアを叩く音がした。
「はい。どうぞ。」
「香ちゃーん～。　来たわよ～。」
僕の返事に、暢気な声で答えたのは、母の明美で、ゆっくりと扉を開けて中に入ってきた。
（ふぅ・・・）
僕は、キリのいい所でしおりを挿み、読書を中断した。
この現実に戻った時の高揚感の凋落は、何時でもなんとも寂しいものだった。
「香ちゃん、今日は元気そうね、よかったわ～。　そうそう、今日はあなたの好きな苺のショートケーキ持ってきたわよ～。一緒に食べましょう。」
そう言って、母は手に持っていた小さな箱を僕に見せて、近くの土台の上に置き、お皿とフォークを3セット取り出した。

（えっ！）
と僕は目の色を変えて母を見た。
「いいの！？　食べちゃって！？」
「ふふっ。香ちゃんは、本当にケーキに目がないわね。まるで、女の子みたいに。」
確かに僕はケーキが大好きだ。食べたときに舌に感じるあのまろやかな甘さが僕の心を鷲掴みにしているのだ。
「べっ、別に、性別は関係ないよ！　そんなことより、本当～に食べていいの？」
「ええ。今日は特別に先生からＯＫが出たから。」
「やった！じゃあ速く食べよう、食べよう。なんか3つあるみたいだけど、僕が2つ食べちゃおう。うんうん。」
まるでどこか別の誰かに向けて言うかのように僕は言った。

「さて、食べようかなぁー。どうしようかなぁーと」
なにやらドアの方から刺すような視線が来ている気がしたが・・・・無視した。
「いやぁー！本当においしそうだぁ～。うれしいなぁ～、二つも食べれるなんて～。」
「じゃあ、いっただっきまー・・・」

『まって！』
その時、突然ドアをガラッと勢いよく開けて、一人の小学生ぐらいの小さな女の子が入ってきた。
（ふふっ。かかった、かかった。）
っと内心僕はほくそえんだ。
「まってよ！　お兄ちゃん！　由愛の分本当に食べるのっ！？」
そう言ってツインテールの髪を逆立てるように、ほほを風船のように膨らませながら、開口一番怒鳴ってきたのは、僕の妹の由愛だった。
「仕方ないじゃん。だって由愛の姿見えなかったし、だったらもったいないから食べちゃおうって思っただけだよ。　それに由愛、どうして母さんと一緒にすぐに入ってこなかったの？」
「えっ！・・・　そ、そんなこと別にいいじゃん！ちょっと病院の中を見てただけだよぉ！」
なんとも苦しい言い訳のような気がしたが、これ以上いじるのもかわいそうなので、ここらでやめておくことにした。
「そうか、そうか、僕が悪かったよ。じゃあ由愛、こっちに来て一緒にケーキ食べような。」
「う、うん。たべるっ。」
そう言うと、由愛は一見恥ずかしそうに、しかし目輝かせながらをしながら、寄ってきた。
（かわいいやつ）
と思いながら、寄ってきた由愛の頭を軽く撫でてやった。

母はその光景を目を細めるようにして見ていた。

「そういえば、香ちゃん。『香ちゃん、今日は調子がいい見たいよ』って遥ちゃんに伝えたら、午後には見舞いに来てくれるって。」

「うん、そう、わかったよ。」

遥は幼少期からの幼馴染で、病気がちな僕を何故かいつも甲斐甲斐しく世話をしてくれている。

（自分のことだって、色々あるだろうに）

と思わないこともないけれど、こんな僕に付き合ってくれる数少ない友人の一人して、とても感謝していた。

「いつも、甲斐甲斐しく世話をしてくれる女の子・・・・。これは香ちゃんに、脈ありね。」

「いやいや、そんなことないって。母さん・・何いってるんだよ。」

（本当にそんなわけないじゃないか。あいつはどう考えても僕をペットかなんかと思ってるよ・・。）

「あら、そう？　じゃあそういうことにしておいてあげる。　ふふっ。」

そんな時、

『ムッ！』

っと妹が口を尖らせた気がしたが、きっと気のせいだろう。

しばらくして、母と妹が病室を去った後、なにか体が熱く火照って来たような気がした。

（どうしたんだろう？）
っと疑問に思いはしたが、
（きっといつもの発作だろう。いい調子も長くは続かなかったなぁ。）
っと開き直り、体が許す限りに読むことに決めて、僕は再び読書を再会した。

本はちょうど、数々の名声を得た主人公が王国に呼ばれて王様と対面する場面だった。
（この主人公は、ひどく落ち着きはらっているように書かれてるけど、もし彼が僕だったらどうだろう？こんなふうに落ち着いて居られるかな？）
と、思いつつ、さらに、読み進めていくと、
主人公の力に目をつけた王女が、主人公を自分直属の騎士にしたいと言い出し、物議を醸し出す場面があり、
（姫様は、勝手だなぁとか、いや実は裏があってのことじゃないか？）
など、体に汗を滲ませながら思案を巡らしていた。

それが、この世界で最後に僕が思考したことだった・・・・・・

前章（中）~少年と家族~（後書き）

ダラダラと書いてしまいましたが、次で前章を終わりにして本編の方へ行きたいと目論んでおります。

また、よろしくお願いします　m（　）m

前章（後）~消失~（前書き）

今回で、前章を終わります。

前章（後）~消失~

同日午後

６限目の終了のチャイムが鳴り響くなか、私は帰宅の準備を始めていた。

私は基本的に部活に入ってはいるが、ほとんど出席したことはない。

とは言っても、顧問の先生や部長に咎められたりはしなかった。

なにやら、この学校では暗黙の了解というものが多々存在するらしい・・・主に私に対してだけど・・・。

「遥ぁ～～～。　今日も香君のとこ？」

「えっ？」

「あっ！聞くまでもなかったね。おー、お熱いことで。　お幸せにぃ～～～～。」

と友人が、私に返答する機会すら与えてくれずに、去って行った。

「ハァ～。」

こんなふうに、みんな、私と彼の関係を邪推しているが、お見舞いも実際は週２・３ぐらいのもので、後は父子家庭だから弟や妹の面倒を見なくてはいけないの言うのが真実だった。

とは言っても、別段彼が嫌いというわけでもない。彼は昔からの幼馴染で、彼のいい所もたくさん知っているし、何より彼の苦しみをいつも近くで見てきた私は、彼を助けてあげたいという母性本能のような気持ちが多分にあった。

（まあ、何より香をいじるのは楽しいからね！）

そんなことを考えているうちに遥は、学校をあとにしていた。

今日の午前中に、私は香のお母さんから、香がいつにも増して元気だという内容のメールを受け取っていたので、今日はいっぱい話してあげようとか、香の好物をみやげに持って行ってあげようなどと思い、近所で有名なケーキ屋によってから病院へ向かった。

そして、病院の受付で手続きをすませた私は、香が使用している病室へと向かった。

病室に着いた私は、ドアを叩いた。

・・・私はこの時のことを一生忘れないと思う・・・。

「ん？」

ドアを叩いた時、いつもの香の高い声が返って来なかった。

（さては、あいつ寝てるなぁ～。ちゃんと香のお母さんに来るって言っておいたんだけど～。）

寝てしまっているなら仕方がないので、せめて顔だけでも見ておこうと思って中に入った。

案の定、香は寝ているようで、隣には今まで読んでいたのであろう小説が布団に落ちていた。

私は、小説を近くの土台に置いてあげた後、

「本当にしっかり寝ちゃって、ふふっ。」

（ちょっと、かわいいかも）
なんて思いながら、じっと彼の顔を見ていると、ある違和感に気づいた。

あまりに整然とし過ぎだったのだ。彼の顔が・・・。

「えっ？」
急に不安に苛(さいな)まれた私は、すぐに彼の鼻に手を近づけた。
そして、抱いていた不安は現実となって私を襲った。
・・彼は呼吸をしていなかった・・。

ここ集中治療室では、今一人の少年に対する手術が行われていた。
「先生！依然血圧低下しています！危険な状態です！」
「わかっている！」
少年に対する手術は、ひどく至難を強いられるもであり、なにより彼の体力自体がもう持ちそうになかった。到底成功するとは思えず、賭けのようなものだった。

その時少年は、ある夢のような幻覚のようなものを見ていた。
突き刺すような光が自身を含め自身の周囲を照らしていて、それ

はまるで天国に上るかのような心地だった。

「汝・・・・る・・・か、是・・・と・・・す・・・か。」

そんな時だった、突き刺すような光の向こうから、途切れ途切れてだが声が聞こえてきたのは。

（んっ？）

と、ふと疑問を持ったが、

（きっと、僕を天国に連れて行ってくれる人かなんかだろう。）

と自分なりの解答を浮かべて、

僕はこの心地よさに身を委ねた。

（母さん、由愛、そして・・・遥・・・、先に行くけど達者でな。）

そして、僕の意識はそこで途絶えた・・・。

一人の少年の命の火は消えた。しかし、それと同時に、どこかでまた新たな命の火が灯った。

（続く）

前章（後）~消失~（後書き）

前章を終わりいよいよ、次の段階へ移行します。

ここまで、読んでくださったみなさんありがとうございます　m（＿＿）m

と言っても、そんなに書いてませんけど（笑）

ここまで書いてなんですが、自分としてはやはりこの前章、自分の力不足のせいで色々と物足りない所があると思いますので、また後日改訂したいなと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4805z/

若き姫の荊棘（けいきょく）

2011年12月17日09時55分発行